卒業論文

食品廃棄に対する社会学的考察

――フードバンクの可能性――

2012 年度入学

九州大学　文学部　人文学科　人間科学コース

社会学・地域福祉社会学専門分野

2016 年 1 月提出

要　約

本論文は、廃棄される運命にある食品を、それを必要としている施設などに無償で提供する活動を行っている団体である、フードバンクが果たす役割の可能性について考察していくことを目的としている。

第 1 章では、食品を廃棄することによって、人道的、社会的、経済的問題が引き起こされていることを確認している。まだ食べられるにも関わらず廃棄されている食品である食品ロスは年間約 800 万トン生じており、企業から出るものと家庭から出るものに分けられる。食品の流通の中には、食品ロスを助長する様々な制度がある。それらの制度は、もとをたどれば消費者の意識の影響を受けており、悪循環を生んでいる。食品ロスを削減するための取り組みとして、制度の緩和や、値下げ販売のほかに、フードバンクが行う活動がある。

第 2 章では、フードバンクについての先行研究について述べている。フードバンクは、食品ロス削減と福祉的な支援の 2 本を主軸に活動を行っているテーマ型コミュニティであるが、地域からの信頼を得るのが難しいとされている。また、フードバンクは起きている問題に対する応急処置に過ぎず、活動が根本的な解決にはつながらないと言われることもある。

第 3 章では、フードバンクの活動の実態と社会の中でフードバンクが目指す役割を知るために行った聞き取り調査をまとめている。調査の結果、フードバンクで活動を行っている方自身、活動が対症療法であると感じることがあるという。しかし、様々な組織のハブとしての役割を果たせるように活動を広げていくつもりであると語った。

第 4 章では、聞き取り調査の分析を行っている。フードバンクは NPO の活動であり、行政とは異なる形で生活困窮者の支援を行うことができる。しかし、NPO には財政の面では弱い部分もある。加えて、食品ロス削減の観点からは、捌ききれないため企業から受け入れられない大量の食品が存在する現状があり、フードバンクの数や活動の規模にも改善の必要がある。そのため、「食」という切り口の多面性を活かしつつ、行政や他の組織と連携しながら課題にアプローチすることが効果的である。さらに、調査した団体でもともと築いていた個人間のつながりを活用して仲間を増やしていったように、フードバンクは希薄になった民間の関係を強固なものにする可能性を秘めている。

目 次

はじめに 1

1 食品の廃棄と対処の現状 1

1.1 問題の背景 1

1.2 食品ロスの定義と現状 3

1.3 流通の段階での食品ロス 5

1.3.1 納品期限と賞味期限 7

1.3.2 軽減税率の影響 10

1.4 食品ロスの再利用 11

1.5 フードバンクの存在 12

2 フードバンクについての先行研究 14

2.1 コミュニティの分類から見るフードバンクの課題 14

2.2 フードバンクのある社会 14

2.3 産業化に伴う暮らしの変化 15

3 フードバンクの実態 17

3.1 フードバンク活動の前に 18

3.2 食品の援助へ 20

3.3 フードバンクの仲間集め 23

3.4 ボランティアとして関わる人々 25

3.5 取り扱っている食品 27

3.6 会費の設定からうかがえる思い 28

3.7 メディアの影響 29

3.8 フードバンクが抱える課題 31

3.9 フードバンクとして果たしたい役割 34

4 フードバンクの可能性 38

4.1 ハブとしてのフードバンク 38

4.2 NPO として活動することの強み 39
4.3 現物支給によるスティグマの回避 41
4.5 農村の暮らしからのヒント 42
4.6 今後の課題 44
おわりに 45
参考文献・URL 46